

前期のテーマであった多重調和関数についての復習をし、関連する練習問題を解いた。最後に、様々な擬凸性の定義を行なった。

## 1 擬凸性

### 1.1 多重調和関数についての復習

$\Omega \subset \mathbb{C}^n$  を開集合とすると、

1.  $u : \Omega \rightarrow \mathbb{R} \cup \{-\infty\}$  が多重劣調和であるとは、 $\forall \bar{z} \in \Omega, \forall \bar{w} \in \mathbb{C}^n$  に対して、

$$u \circ \phi_{\bar{w}} : \phi_{\bar{w}}^{-1}(\Omega) \rightarrow [-\infty, \infty) \text{ が劣調和になることである。}$$

ただし、 $\phi_{\bar{w}}(\tau) = \bar{z} + \tau \bar{w}$  ( $\tau \in \mathbb{C}$ ) とする。 $\Omega$  で多重劣調和な関数全体の集合を  $P(\Omega)$  と記す。

- (a)  $u \in C^2(\Omega)$  のとき、 $u \in P(\Omega)$  となるための必要十分条件は、

$$L(u)(\bar{w}) = \sum_{j,k} \frac{\partial^2 u}{\partial z_j \partial \bar{z}_k} w_j \bar{w}_k \geq 0 \quad \text{for } \forall \bar{z} \in \Omega, \bar{w} = (w_1, w_2, \dots, w_n) \in \mathbb{C}^n$$

を満たすことである。特に、 $L(u)(\bar{w}) > 0$  であるとき、 $u \in C^2(\Omega)$  を強多重劣調和という。

- (b)  $\forall z_0 \in \Omega, \Delta(z_0, \bar{r}) \subset \Omega$  に対して、

$$u(z_0) \leq \frac{1}{(\pi r_1^2)(\pi r_2^2) \cdots (\pi r_n^2)} \int_{\Delta(z_0, \bar{r})} u(\xi) dV(\xi)$$

を満たす。

- (c)  $u \in P(\Omega)$ ,  $u(z) \not\equiv -\infty$  であれば、 $u$  は  $\Omega$  上局所可積分である。

2.  $u, v \in P(\Omega)$ ,  $\alpha > 0$  に対して、 $\alpha u, u + v, \max(u, v) \in P(\Omega)$

3. (a)  $\{u_\nu\}_{\nu \in \mathbb{N}} \subset P(\Omega)$  が  $u_\nu \downarrow u$  ( $\nu \rightarrow \infty$ ) を満たすならば、 $u \in P(\Omega)$

- (b)  $u_\nu \rightarrow u$  ( $\mu \rightarrow \infty$ ) が  $\Omega$  でコンパクト一様収束で、 $u_\nu \in P(\Omega)$  ( $\mu \in \mathbb{N}$ ),  $u(\bar{z}) \not\equiv -\infty$  for  $\forall \bar{z} \in \Omega$  ならば、 $u \in P(\Omega)$

4.  $\rho \in \mathcal{D}(\mathbb{R})$  は、 $\rho \geq 0$ ,  $\text{supp } \rho \subset [0, 1]$  を満たし、かつ、

$$2\pi \int_0^1 \rho(x) dx = 1$$

とする。 $\varepsilon > 0$  に対して、

$$\rho_\varepsilon(\bar{z}) = \frac{1}{\varepsilon^{2n}} \rho\left(\frac{|z_1|}{\varepsilon}\right) \rho\left(\frac{|z_2|}{\varepsilon}\right) \cdots \rho\left(\frac{|z_n|}{\varepsilon}\right) \quad \text{for } \forall \bar{z} = (z_1, z_2, \dots, z_n) \in \mathbb{C}^n$$

<sup>1</sup> 数学工房 <http://www.sugakukobo.com/>

とおくと、 $\rho_\varepsilon \geq 0$ ,  $\text{supp } \rho_\varepsilon \subset \Delta(0, \varepsilon)$  であつ、

$$\int_{\mathbb{C}^n} \rho_\varepsilon(\vec{x}) dV(\vec{x}) = 1$$

を満たす。このとき、 $u \in P(\Omega_\varepsilon) \cap C^\infty(\Omega)$  に対して、

$$u * \rho_\varepsilon \searrow u \quad (\varepsilon \downarrow 0) \quad \text{in } \Omega$$

が成立する。ただし、 $u * \rho_\varepsilon$  は  $u$  と  $\rho_\varepsilon$  の合成積、すなわち

$$(u * \rho_\varepsilon)(\vec{z}) = \int_{\mathbb{C}^n} u(\vec{w}) \rho_\varepsilon(\vec{z} - \vec{w}) dV(\vec{w})$$

5.  $f$  を  $\mathbb{C}^n$  の開集合  $\Omega$  から  $\mathbb{C}^m$  の開集合  $D$  への正則写像とすると、任意の  $u \in P(D)$  に対して、 $u \circ f = f^*(u) : \Omega \rightarrow \mathbb{R} \cup \{-\infty\}$  は  $\Omega$  で多重劣調和である。
6. 実数値超関数  $T \in \mathfrak{D}(\Omega)$  が  $u \in P(\Omega)$  により与えられる超関数に等しい必要十分条件は、 $\varphi \geq 0$  なる任意の  $\varphi \in \mathfrak{D}(\Omega, \mathbb{R})$  に対して、

$$\sum_{j,k} \frac{\partial^2 T}{\partial z_j \partial \bar{z}_k}(\varphi) w_j \bar{w}_k \geq 0 \quad \text{for } \forall \vec{w} = (w_1, w_2, \dots, w_n) \in \mathbb{C}^n$$

が成立することである。

#### 練習問題 1.1.

1.  $f \in \mathcal{A}(\Omega)$ ,  $f \neq 0$  であれば、 $|f|$ ,  $\log |f| \in P(\Omega)$  であることを示せ。
2.  $f \in P(\Omega)$  であれば、 $\exp \circ f \in P(\Omega)$  であることを示せ。

定義 1.1 ( $p$ -凸).  $\Omega \subset \mathbb{C}^n$  を開集合とする。  $K$  が  $\Omega$  のコンパクト集合とすると、 $K$  の正則包とは、

$$\hat{K}_\Omega = \bigcap_{f \in \mathcal{A}(\Omega)} \left\{ \vec{z} \in \Omega \mid |f(\vec{z})| \leq \sup_K |f| \right\}$$

$K$  の  $p$ -凸包とは、

$$\tilde{K}_\Omega = \bigcap_{u \in \mathfrak{P}(\Omega)} \left\{ \vec{z} \in \Omega \mid |u(\vec{z})| \leq \sup_K |u| \right\}$$

で定義される。

練習問題 1.2.  $K \subset \tilde{K}_\Omega \subset \hat{K}_\Omega \subset \Omega$  であることを確かめよ。

## 1.2 様々な擬凸性

以下、 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$  を開集合とする。

定義 1.2 (D-擬凸).  $\Omega$  が D-擬凸であるとは、関数

$$\delta : \Omega \ni \vec{z} \rightarrow -\log(d_{\partial\Omega}(\vec{z})) \in \mathbb{R} \cup \{-\infty\}$$

が多重劣調和であることを言う。

定義 1.3 (L-擬凸 (Lelong 擬凸)).  $\Omega$  が L-擬凸 (Lelong 擬凸) であるとは、 $u \in C(\Omega) \cap P(\Omega)$  が存在して、任意の  $r \in \mathbb{R}$  に対して、

$$\Omega_{(u,r)} = \{z \in \Omega \mid u(z) < r\} \subset\subset \Omega$$

が成立することである。

定義 1.4 (強擬凸).  $\Omega \subset \mathbb{C}^n$  が領域の時、強擬凸であるとは、 $\Omega$  を含む領域  $G$  が存在して次の性質をもつことを言う。

1.  $\bar{\Omega} \subset G$

2.  $v \in C^\infty(G) \cap P(\Omega)$  なる  $v$  が存在して、 $\tilde{\Omega} = \{z \in G \mid v(z) < 0\}$  の一つの連結成分として  $\Omega$  が表示されている。

$\Omega$  が強擬凸単調増加領域列  $\{\Omega_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  により、 $\Omega_n \downarrow \Omega$  ( $n \rightarrow \infty$ ) とできるとき、 $\Omega$  を G-擬凸 (Grauert 擬凸) と言う。

定義 1.5 (P-擬凸).  $\Omega$  が P-擬凸であるとは、任意の  $\Omega$  内のコンパクト集合  $K$  に対して、 $\tilde{K} \subset\subset \Omega$  が成立することを言う。

定義 1.6 (解析的円板族).  $U$  を  $\Delta^-(0, r)$  の開近傍とし、定義写像  $f : [0, 1] \times U \rightarrow \mathbb{C}^n$  は連続で、 $f_\lambda(t) = f(\lambda, t)$  ( $\lambda, t \in [0, 1] \times U$  とおいたとき、各  $\lambda \in [0, 1]$  を固定すると、 $f_\lambda \in \mathcal{A}(\Delta^-(0, r), \mathbb{C}^n)$  を満たすものとする。この  $f_\lambda$  に対して、

$$D(\lambda) = \{f(\lambda, t) \in \mathbb{C}^n \mid |t| \leq r\}$$

とすると、 $\{D(\lambda)\}_{\lambda \in [0, 1]}$  を解析的円板族と言う。このとき、 $D, \delta(D)$  を

$$D = \bigcup_{\lambda \in [0, 1]} D(\lambda), \quad \delta(D) = \{f(\lambda, t) \in \mathbb{C}^n \mid |t| = r\}$$

とおく。

定義 1.7 (Oka-擬凸).  $\Omega$  が Oka-擬凸であるとは、 $\Omega$  の解析的円板族  $\{D(\lambda)\}_{\lambda \in [0, 1]}$  が  $D(0) \cup \delta(D) \subset\subset \Omega$  を満たすならば、 $D \subset\subset \Omega$  が成立する性質をもつことを言う。

記録 by J.S